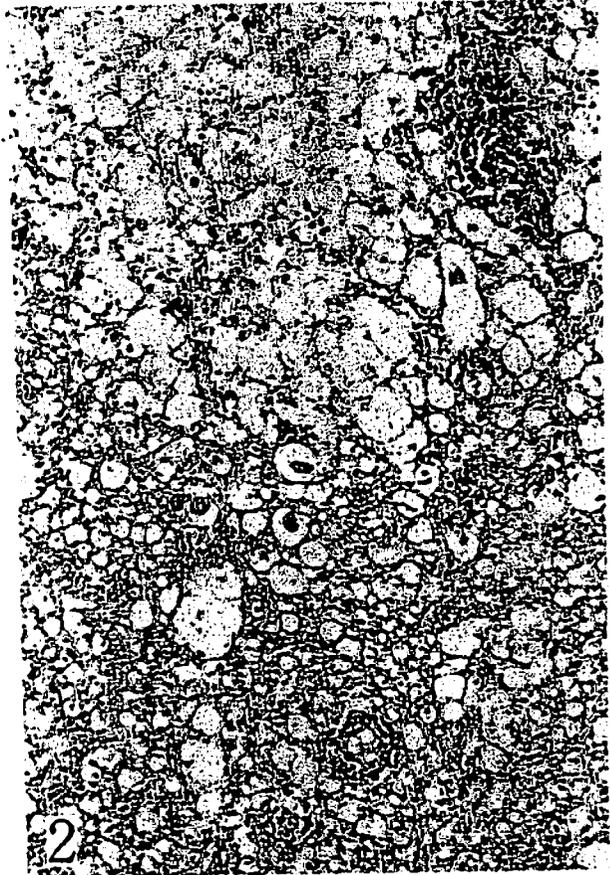
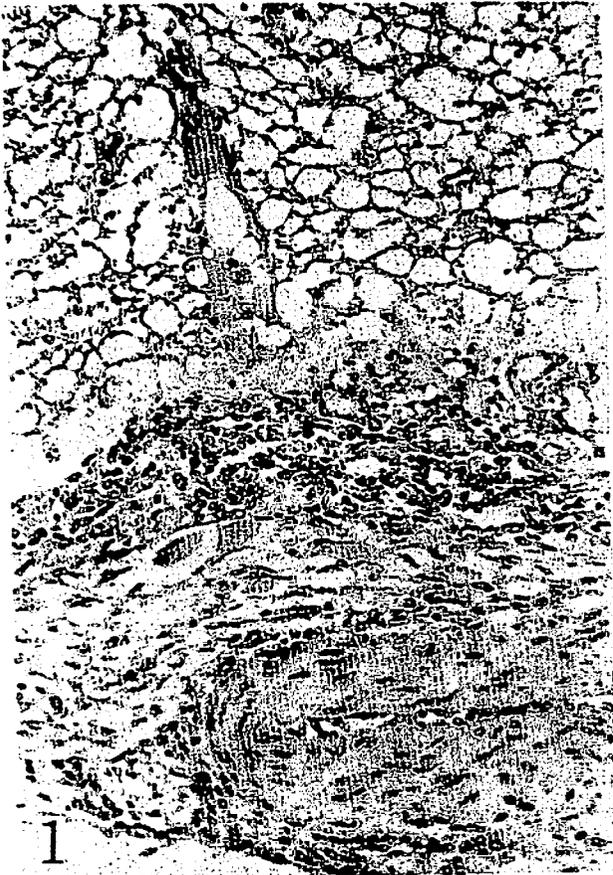


豚の脊髄軟化

北里大学獣医学科家畜病理学教室出題 第16回獣医病理学研修会標本 No.245



〔症例〕動物：豚(ランドレース種)，♀，6ヶ月令。
飼育地：十和田市。剖検日：1974年10月26日。

〔臨床的事項〕腰麻痺，多頭飼育中の一頭で，発病期日は不詳であるが，剖検数日前より犬座姿勢を示し起立不能に陥いる。

〔主要剖検所見〕1. 脾臓における陳旧膿瘍の多発：鳩卵大乃至鶏卵大に至る被嚢化乾酪病巣多発，表面凹凸著しく実質萎縮（脾の大きき28×6×3cm）。2. 全身リンパ節の髓様腫大。3. 肝のうっ血性腫大並びに腹水の増量。4. 全身実質臓器の著しい混濁。5. 脊髄腰部膨大部硬膜上腔における小豆大被嚢化膿瘍の形成。6. 後軀諸筋肉における新鮮出血巣並びに蠟様変性。7. 両側後肢関節（股・膝関節）における透明関節液の増量。8. 脳室の軽度拡張及び透明髄液の増量。9. 両側肺心葉における限局性肺炎巣。10. 軽度の萎縮性鼻炎。

〔病理組織所見〕脊髄は頸髄から腰髄の全長に亘り採取され，各分節から間断連続的に検討された。提示された標本は硬膜上腔に形成された膿瘍部の腰髄である。尚菌検索において膿瘍部から *Candida albicans* が分離された。又，頸・胸髄における病変の質的・量的分布は概して軽度であった。腰髄硬膜上腔に形成された炎性肉芽組織は髄膜の線維性肥厚乃至癒着及び根神経線維の変性をもたらしていた（Fig. 1）。円形細胞の浸潤とともに脊

髄動脈の壁の肥厚及び腔の狭小化が認められ，同時に軟膜下及び血管結合織梁の水腫と白質の海綿状浮腫性状態が観察される。白質にみられる海綿状病態（Lückenherd）は両側性の拡がり，Funiculus posterior 及び Funiculus anterior に分布していた。LFB染色では明らかな脱髄を示し，又軽度の Astroglia の反応を伴っていた。一方，軸索の膨化，崩壊消失が明らかで，さらに濃淡種々な染色性と泡沫状微細空胞を具備するものも多数認められた。又かゝる病巣内には大小の限局性の軟化融解像が指摘された（Fig. 2）。軟化領域には毎常囲管性の細胞浸潤像及び Gitterzellen の繁殖像が認められた。灰白質においては灰白交連部で細胞反応を伴う脱髄病変と小動脈壁の硬化性病態が目立っていた。しかし前角神経細胞は未だ全貌を保つものが多く認められた。

以上の形態学的所見並びにその病巣分布は脊髄病変の発現に対して血行循環との関連性を示唆しているものと思われた。即ち，硬膜外に形成された炎性肉芽が，その部の血管を介して間接的に対応する脊髄実質に循環障害を起したものと推測がなされた。

組織診断：硬膜外炎性肉芽を伴った脊髄の貧血性軟化。
討議：化膿性髄膜炎並びに腰髄の白質変性症を伴う貧血性軟化。